

13
(木)

神に義とされる祈り

ルカによる福音書一八章9〜14節

言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。(14)

ファリサイ派の人と徴税人の二人が、神殿で祈りをささげました。ファリサイ派の人は近くにいる徴税人を横目に眺めながら、「この徴税人のような者でないことを感謝します」と、自らの正しさを神の前で誇りました。これに対して徴税人はただ一言、「罪人の私を憐れんでください」と祈りました。主イエスは、神の前に義とされたのは徴税人だったと言われました。私たちが真実に神の前に立つとき、その聖なる臨在に打たれて、「罪人の私を憐れんでください」としか祈れなくなるのです。けれどもそこで、「あなたの罪は赦された」という神の声を聞くことになります。これこそ、神と人間との間になされるべき根源的な対話としての祈りと言うべきでしょう。私たちの日々の祈りが、独り言で終わるのではなく、生ける神との真実な対話となりますように。